

「チョコレートと青い空」で つながる

作家
堀米薫



かつての研修員クリスさん(左から5人目)の農場を訪れた著者(左から2人目)。キュウリやナス、トウモロコシなどが栽培されていた

私が暮らすのは宮城県角田市。仙台から南へ約40キロ、大豆やウメなどの栽培が盛んな街だ。地元の農家が立ち上げた「角田市アジアの農民と手をつなぐ会」を中心に、開発途上国で農業に携わるJICAの研修員を多数受け入れている。

今から15年前、我が家で初めて受け入れたのが、ガーナからきたクリスさんだった。ガーナといえば「チョコレート」の国。だと思っていた私たち家族。しかし、「現地の子どもたちは、ほとんどチョコレートを食べることがない」と彼から聞いてショックを受けた。自らの無知に、その時初めて気付かされた。

その後毎年のように、ケニア、パラグアイ、ドミニカ共和国、アンティグア・バブータなどからやってきた研修員を受け入れた。彼らと過ごした時間は、とても意

義深いものだった。自分の国を良くしたいという熱意に刺激を受けるとともに、文化や事情は違っても家族への愛は人類共通であることに、深く共感した。

農業や自然をテーマに児童文学を書くようになった時、そんな研修員たちとの経験を物語にしたいと考えた。そうして出版したのが「チョコレートと青い空」(そうえん社)。日本の農家の小学生とガーナ人の青年、エリックさんの心の交流の話を通じて、これからの時代を生きる子どもたちに、もっと社会や世界に目を向けてほしいという願いを込めた。子どもと大人と一緒に読むことができるのが児童文学。2012年度の全国課題図書にもなり、幅広い年代の方に読んでもらうことができた。



堀米さんが執筆した「チョコレートと青い空」の翻訳版「Chocolate and The Blue Sky」(二階恭子翻訳)は、2014年6月にガーナで出版

その後、台湾でも翻訳版が出版され、他の国の人もこの物語を共有できる手ごたえを感じていたころ、当時の駐ガーナ日本国特命全権大使夫人である二階恭子さんから、「英訳して子どもたちに読み聞かせたい」というメールが届いた。

当初は読み聞かせだけの予定だったが、二階さんの翻訳原稿を読んだアミサ・アーサー副大統領夫人が、ガーナでの出版を強く勧めてくれた。日本への理解を深めてもらえるよう、英訳本には日本の田園風景や食べ物カラー写真もたくさん入れた。

今年6月、出版記念会に参加するために首都アクラを訪れ、ついに、念願のガーナの土を踏んだ。日本製の中古車がたくさん走っていて道路は大渋滞。高層ビルや立派な門構えの家も建っていて、一見都市化が進んでいるように見えた。しかし停電がたびたび起き、インフラの整備が追いついていない印象はぬぐえなかった。

二階さんと一緒に、アクラ市内の小学校を訪ねることができた。世界地図を指差して「日本はどこにあるか知ってる?」と質問をすると、「戸惑う子どもたち。「まだまだ日本のことは、よく知られていないんだな」と少し残念に思ったが、二階さんが英語で本の読み聞かせを始めると、子どもたちから笑い声が起こった。主人公の少年が、日本語とガーナ語の発音が似ていることに

びつくりする場面だ。子どもたちからは、「エリックさんが自分の国に誇りを持っていることが印象に残った」などの感想を聞くことができ、国境を超えて共有できる物語の力を確信した。そして、ガーナの子どもたちにも、もっと日本のことを知ってほしいと、さらに強く思った。

その後、かつて我が家を訪れたクリスさんが働いているアクラ郊外の農地を見学させてもらった。15年ぶりの再会だ。かんがいとスプリンクラーが整備された畑で、収穫物を頭の上に載せて運ぶ女性たちを見て

いたら、クリスさんに「日本で学んだことは役に立っていますか?」と尋ねずにいられた。すると、満面の笑みで返ってきた答えは、「very very very」の「very」が3回も思わず、「あー、良かった!」と心の底から感動し、喜びを感じた。

ジョン・マハマ大統領は、在ガーナ日本大使館での勤務経験を持つ親日派で、英訳本の前書きを執筆していただいた。「日本は長年にわたり、道路建設などの基礎的なインフラ整備に加え、保健や教育などさまざまな分野でガーナを支援してくれました。2011年の東日本大震災では、ガーナの人々も日本に連帯感や共感の気持ちを伝えましたが、その直後も日本は決められていた政府開発援助(ODA)を途切れることなく提供し続けてくれたのです。私は、日本人の勤勉の精神、誠実さ、度量の広さに敬意を表します」(抜粋)。

「Chocolate and The Blue Sky」を通して、ガーナの子どもたちが物語の主人公と一緒にわくわくしながら、日本への親しみを深めてくれたらどんなに素晴らしいことだろう。アクラでも本屋さんにはわずかな軒数。学校の副読本として贈るための寄附を募っているところだ。1冊でも多くの英訳本が、ガーナの子どもの手に渡ることを願ってやまない。

同じ空の下、ガーナと日本がさらに心を結び合えますように!



翻訳者である二階さんと共に読み聞かせをしたガーナの小学校の子どもたちと

<Profile>

ほりごめ・かおる

1958年福島県出身。岩手大学大学院修了。児童文芸家協会創作コンクール優秀賞作品『牛太郎、ぼくもやったぜ!』(佼成出版社)がデビュー作。宮城県角田市で専業農家の傍ら、田んぼや畑の中から生まれる物語を書き続けている。児童文芸家協会会員。